

(様式 3)

平成22年度学融合推進センター学融合研究事業 成果報告書

研究テーマ名称	統合的新分野形成過程の理論的検証:「統合生命科学」を例として
応募事業区分	若手研究者研究支援
申請代表者氏名	見上 公一

○ 研究状況報告

本研究では多数の高度に専門化した研究分野がそれぞれの特性を活かし融合することにより新たな教育および研究領域を形成していく過程において、どのような人的・知的・物質的交流が必要とされるかについて科学技術社会論的視点から考察・検証を行っており、そのような分野融合的新領域の形成の実例として総合研究大学院大学において計画されている「統合生命科学を推進する先端的教育研究拠点の構築」というプログラム(以下、「統合生命科学プログラム」とする)を調査対象とした。統合生命科学プログラムの実施は平成22年度概算要求の結果に大きく依存していたため、その内定が通知されるまでの期間については主に文献調査を行った。文献調査の対象となったのは科学技術社会論と生命科学史と呼ばれる分野である。前者では専門知についての分析に加え、学際研究についての分析も広く行われている。後者はそのような分析が歴史的な経緯から生命科学についてどの程度当てはまるのかを検討する資料として有用であった。これらの点については学融合推進センターで開催された公開研究報告会にてポスター発表として簡単に報告した。

実際のインタビュー調査についてはプログラムの実施が最終的に決定するまでに想定していたよりも時間がかかったことや、その他の事情で全体的な議論が進まなかったことから、予定していたよりも小さな規模で行わざるを得なかったが、プログラムの発案に深く関わった生命科学研究科と物理科学研究科の教員2名にインタビューを行うことができた。インタビューではこのプログラムを立案するきっかけや、このプログラムの目的についてなどを伺い、プログラムの全体的なイメージをつかむことができた。また、専攻間の地理的そして分野的な「距離」というものがこのプログラムの運営にあたり一つの鍵となることが明らかになった。平成23年度は4年間の実施が予定されるプロジェクトの1年目ということで、議論の対象も比較的限られてくることが予見されるが、専門者コミュニティにおける共通認識の形成と学問的・地理的・社会的な境界線の成立あるいは再構築という点についてはこの1年目が特に重要であると考えられる。特に本プログラムの導入的授業となる統合生命科学入門の講義の在り方については関係する教員に対し広くインタビューを実施し、教員間あるいは学生と教員の認識の共有について注目しながら更に分析を進めていくこととする。

○ 当該事業年度において達成された研究成果

(様式 3)

平成22年度学融合推進センター学融合研究事業 成果報告書

平成22年度は主に文献調査を行った。科学技術社会論では専門知についての分析に加え、学際研究についての分析も広く行われている。そのような文献によると専門知の形成はその分野の妥当性と正統性を担保するものであり、歴史的に分野の細分化という過程には研究に利用する実験器具や技術的な進歩が大きく関与していることが分かった。また一方で、学際分野の重要性について広く認識されるようになった現在でも多くの場合には他分野との「共生」には予想されないコンフリクトが生じることがあり、多くの学際分野は共通の社会的問題を抱えるものであること（例えば地球温暖化対策としての環境学など）が分かった。

インタビュー調査の結果からはこのプロジェクトはこのような共通の社会問題を意識したものではなく、研究者としての幅広い知識の必要性和急速に進歩する研究手法に対応した新しい研究課題の抽出といった学術的な指向が高いものであることが分かった。また、その成果は学生への教育という直接的な側面だけではなく、研究者間のコミュニケーションといった広い視点から捉えられるべきものであるということも明らかになった。

実際のインタビュー調査についてはプログラムの実施が最終的に決定するまでに時間がかかったことやその他の事情で全体的な議論が進まなかったことから、予定していたよりも小さな規模で行わざるを得なかったが、平成23年度の初旬は更なるインタビュー調査を実施する予定である。

○ 本研究を基に発表した論文と掲載された雑誌名等のリスト（論文があれば添付）

該当なし